

【論文】

自己概念の多面性と精神的健康との関連 —自己複数性・自己複雑性・自己分化度の観点から—

武藏 諒祐 (東北大学大学院教育学研究科)

織田 信男 (岩手大学人文社会科学部)

I. 問題と目的

現代青年のアイデンティティ

Erikson(1959)によれば、アイデンティティの2要素、自分が連続している感覚と、自分が社会の中で他者から見られている自分と一致し、社会から承認されている感覚の確立は、役割実験を通じて進んでいく。役割実験を通じて、多様な役割やそれに伴う多面的な自己を持つが、適所を見つけることで、複数の自己は一貫した自己に統合され精神的にも安定する。一方、多面的な自己はアイデンティティを拡散させ、精神的健康の低さと結びつく(Erikson, 1959)。また、高石(2009)は、学生相談の中でアイデンティティの模索の悩みが語られることは2000年以降少なくなり、時間をかけ主体的に悩めず、悩みを言語化できずに行動化・身体化する学生が増えたことを指摘する。背景には、現代社会の複雑化、SNSの登場も含む多くの生活領域の獲得があり、人の生活や人生に関わる場が多領域化すると、アイデンティティは複数化、断片化、流動化する(溝上, 2008)。

しかし、近年の臨床場面では、従来ではアイデンティティの拡散と捉えられる多面的なアイデンティティを持ちながらもそのことに葛藤を抱かず、精神的健康の高さを維持している青年が多く指摘されている(川上, 2013; 溝上, 2008; 桐山, 2010)。むしろ現代社会に適応したあり方ではないかと主張する(畑野, 2009)。しかし、多面的な自己に葛藤を抱かない青年に対する実証研究は少ない(木谷・岡本, 2018)。また、各研究者が使用している自己の多面性の概念が異なるために、精神的健康との関連が一致しない。自己概念の多面性を扱う代表的な概念は、「自己複数性」(岩田, 2006; 木谷・岡本, 2018)、「自己複雑性」(Linville, 1985; 義田・中村, 2007; 川人・大塚, 2011:), 「自己分化度」(Donahue, Robins, Robers & John, 1993)がある。

自己複数性について

木谷・岡本(2018)は、自己複数性得点と抑うつ得点とを用いたクラスタ分析の結果、3群を抽出した。自己複数性が高く、抑うつが高い「自己拡散群」、自己複数性が低く、抑うつが低い「一元的自己群」のほかに、自己複数性が高いが、抑うつが低い「多元的自己群」を見出した。「多元的自己群」は、多面的な自己を持ちながらも精神的に健康である。ここで木谷・岡本(2018)が用いた自己複数性(岩田, 2006)尺度とは、岩田(2006)が自己意識を問うために用いた10項目の「多次元自己尺度」(岩田, 2006)の下位尺度である。「多次元自己尺度」は、自己の多面性の感覚を表す「自己複数性(3項目)」、自己拡散の感覚を表す「自己拡散(4項目)」、自己の一貫性を志向する程度を表す「自己一貫思考(3項目)」から構成されていた。木谷・岡本(2018)では、このうちの「自己複数性」のみを用いた。岩

田(2006)は、因子分析の手法を用いて、この「自己複数性」と「自己拡散」の因子が独立であることから、必ずしも自己拡散とは関連しない自己の多面性の感覚があることを示した。「自己複数性」は、以下の3項目より多面性を測定している。〈状況性〉:「場面によって出てくる自分というものは違う」、〈戦略性〉:「意識して自分を使い分けている」、〈仮面性〉:「自分のなかにはうわべだけの演技をしているような部分がある」の3項目である。この「自己複数性」については、抑うつと正に関連すること(木谷・岡本, 2018; 武蔵, 2020)、自己複数性が高いことを理想とし、現実の自己と一致している場合、抑うつは低いことが示されている(武蔵, 2020)。

岩田(2006)の多次元自己尺度は、浅野(2001)が示した自己の多元化の2つの方向性、「素顔の複数化」と「仮面の複数化」の視点を取り入れている。これは浅野(2001)が2000年に社会学者を中心とした青少年研究会による大学生を対象にした調査から指摘された概念で、「素顔の複数化」とは、「(場面や役割に応じた複数の顔の)背後にある自己そのものの複数化」であり、「仮面の複数化」とは、「偽の自分(仮面)を本当の自分(素顔)から切り離した上で前者を複数化する」ものである(浅野, 2001)。同じ自己の多元化でも、「仮面の複数化」に比べて「素顔の複数化」は、心理的不安定さとの関連が弱いことも明らかにした(浅野, 2001)。性質の異なる「素顔の複数化」と「仮面の複数化」であるが、「多次元自己尺度」の「自己複数性」の下位因子においてはその2種類が質問項目に含まれている。

よって、「自己複数性」の三要素は区別すべきである点(木谷・岡本, 2019; 村井・加藤, 2020)や、社会学的研究から作成された「多次元自己尺度」は心理学的な尺度検討がされておらず、他の心理学的尺度との関係から信頼性、妥当性を検証する必要がある点(木谷・岡本, 2019)を考慮すると、「多元的自己群」についてはより精緻に検討される必要があるといえる。

自己複雑性について

自己複雑性(Self-Complexity:SC)とは、自己についての知識を認知的に纏めるために使用される観点(aspect)の数と、その観点が相互に関連している度合いによって決まる関数(Linville, 1985)である。義田・中村(2007)によれば、SCは、(a)自己知識を構成する自己側面の個数(側面数)と、(b)それぞれの自己側面の分化の程度(精緻性)の2要素で定義される。自己側面には、社会的役割、対人関係、活動、特性、目標、能力、自伝的記憶などが含まれる(Hershberger, 1990)。自己分化度研究者であるDonahue et al. (1993)は、自己分化度との差異を強調しながら、「自分自身を解釈する方法の認知的多様性・柔軟性」と表現した。

自己複雑性は単純な尺度によっては測定されず、特性語分類課題(Linville, 1985, 1987)という特殊な課題の結果に対して、情報理論から得られた式を適用して得られる指標 H によって測定される。①まず、課題の参加者は自分の様々な側面を書きだす。②つぎに、ポジティブな性格特性語とネガティブな性格特性語を混在させたリストの中から、自分の各側面にあてはまる性格特性語を選ぶ課題である。指標 H は複数のカテゴリーに様々な要素がどのようにばらついているのかを表す。この課題に即して言えば、カテゴリーが自己の側面に、要素が性格特性語に当たる。書き出される側面や使用される性格特性語の増加が指標 H の値を高める(林・堀内, 1997)。

Linville(1985)は、自己複雑性が、成功、失敗フィードバックによる感情、自己評価の

変化に対して緩衝効果を持つことと、自己複雑性が日々の感情変動と相関していること (Linville, 1985)、自己複雑性がストレスの抑うつ・身体症状などへの影響に対して緩衝効果をもつこと (Linville, 1987)を確認した。

川人・堀・大塚(2010)はSCの効果を以下のようなより日常的な言葉で表現している。例えば、“テニス選手”と“就職活動中の状態”の2側面を持つ人物を想定したとする。二つの側面は成果が重要な点で類似している。一方の側面でネガティブな感情や評価が喚起された場合、他方の側面にネガティブな感情や評価が伝わりやすい。しかし、2側面以外に“家族”のような成果が直接的には重視されない自己側面に気が付いていれば、一方の側面でネガティブな感情が喚起されても、他方の側面にネガティブな感情が伝わりにくく、ストレスフルな状況に陥りにくいと考えられる(川人ら, 2010)。

自己概念には肯定的な側面と否定的な側面の両面が存在するため、近年ではそれぞれの側面における複雑性を肯定的自己複雑性と否定的自己複雑性とに区分して捉えている (Woolfolk, Novalany, Gara, Allen & Polono, 1995)。佐藤(1999)は、否定的自己複雑性と抑うつが正の関連、肯定的自己複雑性が抑うつと負の関連にあることを示した。

自己分化度について

自己分化度(Self-Concept Differentiation:SCD)とは Donahue et al. (1993)によって提唱された概念である。Block(1961)の役割変動性(role variability)という概念を自己に焦点をあてて定義し直した概念であり、その人にとって重要な役割の間で個人の自己がどれくらい変動するか、あるいは安定的かの程度である。Donahue et al. (1993)は、自己複雑性との差異を強調しながら、「場面や役割に応じた自己概念の断片化」という表現をしており、感情的適応との間に負の相関があること、役割満足度との間に負の相関があること、学生時代の成績との間に負の相関があることを報告している。

3つの概念と精神的健康の関連

以上、自己概念の多面性・変動性を扱ってきた3概念について述べてきたが、これらの概念を図1に示す。3概念に共通する自己の多面性の概念における基礎となる部分が「場面や役割に応じた自己概念の断片化」である。これが Donahue et al. (1993)による自己分化度の定義である。これは自己複数性においては、＜状況性＞：「場面によって出てくる自

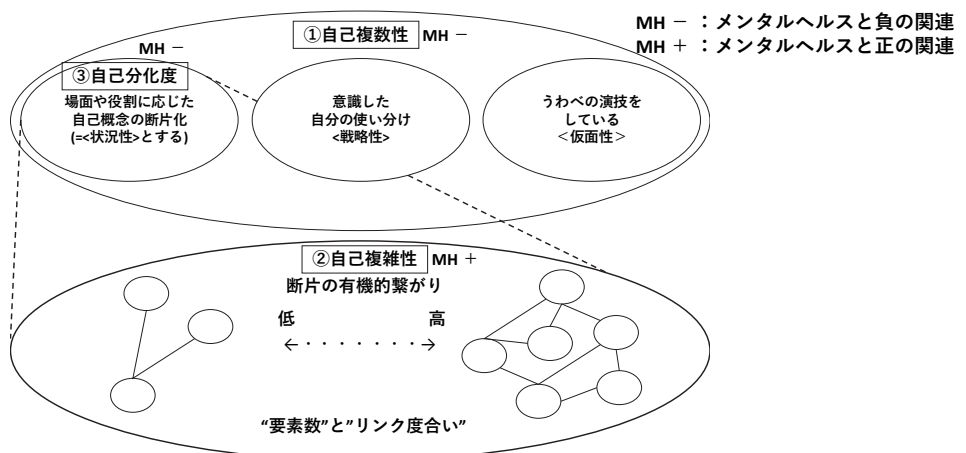


図1：自己複数性・自己複雑性・自己分化度の概念整理図

分というものは違う」で表現されていると整理した。この＜状況性＞の他に、意識した自分の使いわけ：＜戦略性＞と、うわべの演技をしている：＜仮面性＞の要素から構成されるのが自己複数性である。自己複雑性は、「場面や役割に応じた自己概念の断片化」において、そのときの「場面や役割」と要素の多寡と、それら断片の有機的なつながりを表現していると整理した。自己複数性と、自己分化度は精神的健康と負の関連があり、自己複雑性は精神的健康と正の関連があるが、これら3つの関係性は明らかでなく、同じ事態においていずれが精神的健康を有意に予測しうるかを検討した研究は、少なくとも本邦においては確認されていない。そこで、本研究の目的は、これら3つの関係を整理し、精神的健康との関連を検討する。

II. 方法

- 1. 調査協力者** 大学生 115 名(男性 70 名、女性 43 名、その他 1 名、無回答 1 名) 平均年齢 19.6 歳 ($SD=1.36$)
- 2. 調査時期** 2021 年 7 月 14 日～7 月 22 日、10 月 20 日～10 月 27 日
- 3. 質問紙構成** 質問紙は回答の負担を考慮し、第一週実施の前半と、第二週実施の後半に分けた。前半は以下の構成である。**①CES-D** (島・鹿野・北村・浅井, 1985) : 1 因子 20 項目, 4 件法。**②主観的幸福感尺度** (伊藤・相良・池田・川浦, 2003) : 1 因子 15 項目, 4 件法。**③自己複数性尺度** (岩田, 2006) : 1 因子 3 項目, 4 件法。**④特性語分類課題の前半** : 義田・中村(2007)の教示を参考にした教示を行い、調査協力者には自己側面をできるだけ列挙してもらった。自己側面の調査用紙には最大 10 個の欄があった(図 2)。**⑤記述した各側面の重要度** : 5 件法(1 : 全く重要でない～5 : 非常に重要だ)。**⑥フェイスシート** : 性別、年齢、学年、居住形態、アルバイトの頻度、出身都市の規模。後半は以下の構成である。**⑦特性語分類課題の後半** : 列挙した自己側面にあてはまる形容詞を選択する課題である。用意した用紙の上部には側面を転記する空欄があり、下部に Big Five モデルの各因子をあらわすポジティブ・ネガティブ語それぞれ 4 つを選定した合計 40 の性格特性語(林・堀内, 1997)を配置した。調査協力者には、第一週で列挙した側面を、一枚に一側面ずつ転記

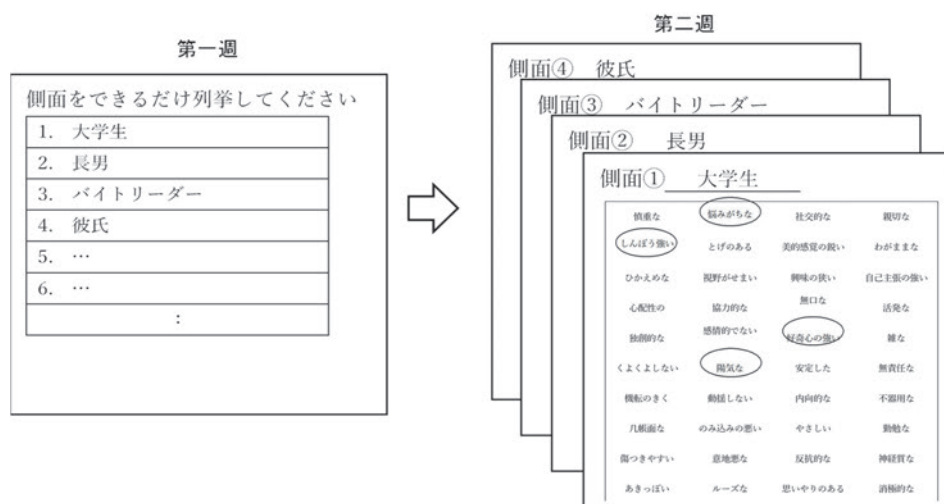


図 2 : 本調査における特性語分類課題の流れの一例

し、転記した側面の特徴としてあてはまる形容詞に好きなだけ丸をつけてもらった(図2)。

4. 調査方法 印刷した質問紙を、2週に分けて2回、授業で配布し回答を求めた。質問紙の冒頭には、研究の主旨と目的、質問紙への回答は任意であること、途中で回答を止めても不利益を被らないこと、回答は統計的に処理され個人は特定されないこと、調査結果は調査目的以外に使用しないこと、データは学会や論文で発表されることがあり、発表後はローデータを破棄することなどの倫理的配慮を記載し、その後の授業で心理教育を行った。

5. 各指標の算出法

自己複数性に関する指標の算出 自己複数性尺度の3項目の合算平均を自己複数性得点とした。自己複数性尺度の下位尺度である<状況性>・<戦略性>・<仮面性>については、該当する各質問項目の素点を各下位尺度得点とした。

自己複雑性に関する指標の算出 特性語分類課題の結果より、式(1)で求められる指標 H (Linville, 1987)を算出し、自己複雑性得点とした。肯定的・否定的自己複雑性は、該当する感情価の特性形容詞のみ用いて、同様の式を用いて算出した。

$$H = \log_2 n - (\sum n_1 \log_2 n_1) / n \quad (1)$$

n : 特性形容詞の総数

n_1 : グループの組み合わせ各パターンに出現する特性形容詞の数

自己分化度に関する指標の算出 特性語分類課題の結果より、式(2)で求められる指標 R (Luo & Watkins, 2008)を算出し、自己分化度得点とした。

$$R = (E-1)/(N-1) \quad (2)$$

E : 特性語×側面のマトリックスに対する主成分分析で得られる第一主成分の固有値

N : マトリックスにおける側面の数

III. 結果

1. 自己複数性・自己複雑性・自己分化度の3尺度間の関係

3尺度間の関連を検討するためにHAD version 16.056(清水, 2016)を用いて、相関分析を実施した(表1)。**①自己複数性と②自己複雑性との間には10%水準で有意な弱い正の関連が見られた(F1とF5)。****①自己複数性と③自己分化度とは関連がなかった(F1とF8)。****②自己複雑性と③自己分化度との間には弱い負の関連が見られた(F5, 6, 7とF8)。**

表1: 各尺度、各指標の相関係数

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9
F1: 自己複数性	—								
F2: <状況性>	.752 **	—							
F3: <戦略性>	.882 **	.545 **	—						
F4: <仮面性>	.823 **	.367 **	.612 **	—					
F5: 自己複雑性	.155 +	.118	.132	.132	—				
F6: 肯定的自己複雑性	.149	.111	.139	.116	.851 **	—			
F7: 否定的自己複雑性	.134	.118	.100	.112	.782 **	.417 **	—		
F8: 自己分化度	-.064	-.148	-.001	-.021	-.188 *	-.191 *	-.197 *	—	
F9: 抑うつ	.238 *	.119	.160 +	.295 **	.089	-.054	.199 *	-.012	—
F10: 主観的幸福感	.073	.027	.085	.066	.166	.285 **	-.063	-.014	-.372 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

2. 3尺度による精神的健康の予測

抑うつ($F(1, 111) = 4.603, p = .034, \eta^2 = .040$) (男性 $M = 14.6(8.62)$; 女性 $M = 18.1(8.37)$)ならびに、否定的自己複雑性に性差が見られたことから($F(1, 111) = 6.148, p = .015, \eta^2 = .052$) (男性 $M = 1.4(.97)$; 女性 $M = 1.8(.93)$)、性差を統制したうえで、これら3尺度が精神的健康をどのように予測するかを評価するために、目的変数を抑うつおよび主観的幸福感とし、説明変数の第一ステップに「性別」ダミー変数(男性 = 1, 女性 = 0)を強制投入法で投入し、第二ステップに<状況性>、<戦略性>、<仮面性>、「自己複雑性」、「肯定的自己複雑性」、「否定的自己複雑性」、「自己分化度」をステップワイズ法で投入した階層的重回帰分析をそれぞれ行った。いずれも決定係数の増分(ΔR^2)が有意であり最終ステップのモデルを採用した(表2)。目的変数を抑うつとした場合の第2ステップのモデルより、女性の方が抑うつは高く($b = -3.406, \beta = -.173, p = .059$)、<仮面性>が高いほど、抑うつが高まることが示された($b = 2.417, \beta = .268, p = .004$)。目的変数を主観的幸福感とした場合の第3ステップのモデルより、肯定的自己複雑性が高いほど、主観的幸福感が高く($b = 2.210, \beta = .380, p = .001$)、否定的自己複雑性が高いほど主観的幸福感は低くなることを示された($b = -1.446, \beta = -.230, p = .039$)。

表2：階層的重回帰分析の結果

ステップ	説明変数	<i>b</i>	β	<i>t</i> 値	ΔR^2	F値変化量
目的変数：抑うつ						
1	性別	-3.519			.040	4.603*
2	性別	-3.406	-.173	-1.912†		
	<仮面性>	2.417	.268	2.970**	.071	8.820**
ステップ	説明変数	<i>b</i>	β	<i>t</i> 値	ΔR^2	F値変化量
目的変数：主観的幸福感						
1	性別	-.103			.000	.007
2	性別	-.397	-.032	-.320		
	肯定的自己複雑性	1.662	.286	2.867**	.081	8.221**
3	性別	-1.133	-.091	-.894		
	肯定的自己複雑性	2.210	.380	3.525**		
	否定的自己複雑性	-1.446	-.230	-2.089*	.042	4.363*

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

3. <状況性>における自己統制感と精神的健康との関連

「場面によって、出てくる自分というものは違う」という<状況性>において、その出てくる自分が、自分が意図して表出しているか否か、つまりコントロール感があるかどうかは、<状況性>における重要な点ではないかと考えた。そこで、コントロール感がある方が、精神的健康に良い影響を与えるという仮説をたてた。そのため「場面によってでてくる自分というものは違う」に対して「3：わりとあてはまる」と「4：かなりあてはまる」

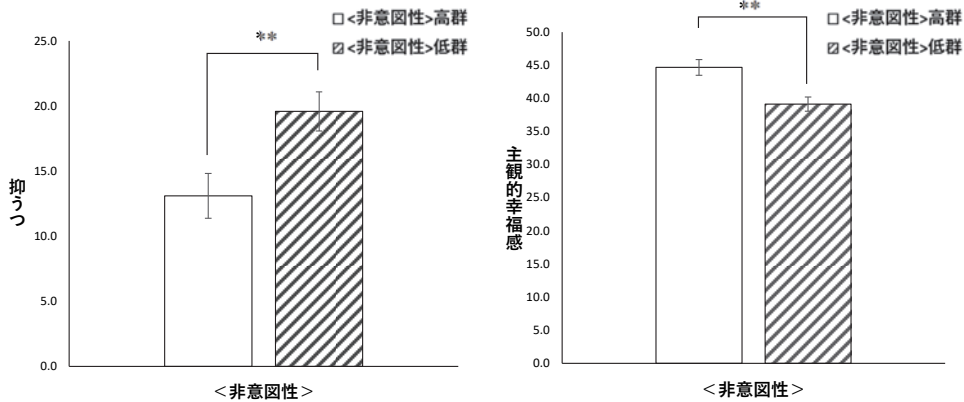


図 3: <非意図性>高低による抑うつ得点 図 4: <非意図性>高低による主観的幸福感得点

と回答した被験者のみを分析対象とした。「場面によって、本来意図している自分とは違う自分が出てくる」に対して、「1: あてはまらない」「2: すこしあてはまる」と回答した被験者を<非意図性>低群とし、「3: わりとあてはまる」「4: かなりあてはまる」と回答した被験者を<非意図性>高群としたとき、<非意図性>低・高群の、抑うつと主観的幸福感の平均得点に差があるかを検討するために、一元配置分析を行った(図 3, 4)。その結果、抑うつ、主観的幸福感ともに要因の主効果が有意となり($F(1, 49) = 8.049, p = .007$; $F(1, 45) = 12.011, p = .001$)、<非意図性>高群の方が(抑うつ: $M = 13.10, SD = 1.726$; 主観的幸福感: $M = 44.67, SD = 1.191$)、低群(抑うつ: $M = 19.59, SD = 1.504$; 主観的幸福感: $M = 39.12, SD = 1.071$)に比べて、抑うつは低く、主観的幸福感が高いことが明らかとなった(図 3, 4)。

IV. 考察

1. 自己複数性・自己複雑性・自己分化度の 3 尺度間の関係

相関分析の結果より、1) ①自己複数性と②自己複雑性との関連は頑健ではない、2) ①自己複数性と③自己分化度とは関連がない、3) ②自己複雑性と③自己分化度との間に弱い負の関連があることが示された。以上より同じ自己概念の多面性を扱った 3 つの概念はある程度独立していると考えられる。自己複数性の 3 つの下位尺度は互いに有意な正の関連を示していたが、<状況性>と<戦略性>の間と、<戦略性>と<仮面性>の間ではともに中程度の正の相関が見られた一方で、<状況性>と<仮面性>の間では弱い正の相関が見られた。そのため自己概念の断片化における<仮面性>の独自性が示唆された。

図 1 の仮説概念図について検証する。自己概念が断片化しており、それらの断片が有機的につながっていくことが、自己複雑性の上昇である。肯定的・否定的に限らず、自己複雑性と自己分化度が負に相関することは概念図を支持する。一方、自己複数性が自己分化度と関連がなかったことは仮説概念図には反しており、検討の余地がある。

自己分化度の指標には種類があり、本研究の仮説においては、本研究で用いた指標 R に導出過程が近いと判断し、 SCD_{PCA} 指標の結果を参考にした。 SCD_{PCA} は自己分化度研究の初期の指標であり、最もベーシックな指標である。その後指標の検討・改良が進み、自己分化度研究の流れで最も厳密な指標(杜・加藤, 2020)を用いたとされる Baird, Le &

Lucas (2006) の指標 SCD_{CrSD} では精神的健康に直接的な影響は示されていない。したがって、今後の検討の方針としては、＜状況性＞と SCD_{pea} (Donahue et al., 1993) との、指標 R と SCD_{CrSD} 指標 (Baird et al., 2006) の関連を検討することが必要と思われる。

2. 自己複数性・自己複雑性・自己分化度による精神的健康の予測

階層的重回帰分析の結果より、自己複数性の下位尺度である＜仮面性＞は、抑うつを統計的に有意に予測しうることが示された。木谷・岡本(2018)では、自己複数性の高さと抑うつとの正の関連が示されていたが、本研究では下位尺度で分析することによって、それが主に＜仮面性＞との関連に起因する可能性が示唆された。この結果は＜仮面性＞の無い方が、心理的不安性さとの関連が弱い(浅野, 2001)という社会学的調査の結果を支持した。

＜仮面性＞はなぜ抑うつと関連があるのだろうか。木谷・岡本(2018)は青年への面接調査より、一元的自己群(「本当の自分」はひとりである。あるいはありたいという考えをもっていること)、多元的自己群(「本当の自分」は複数あるものと考えていること)では[素の自分での感覚]が語られたが、アイデンティティ拡散群では[素の自分での感覚]は語られず、[自己違和感]が語られ、自己知覚の差異を示した。＜仮面性＞とは、素の自分を出表すること、あるいは自分でいない感覚を抱いていることと本来の自己イメージとの不一致を招き、その不一致こそが精神的健康に影響したと考えられる。理想自己と現実自己の不一致は精神的健康に負の影響を及ぼす(Higgins, 1987)。このことは自己複雑性における理想と自己の不一致においても確かめられている(武蔵, 2020)。

主観的幸福感に対しては、肯定的自己複雑性は正に、否定的自己複雑性は負に、予測しうることが示された。この結果は先行研究(川人・大塚, 2011)を支持している。ではなぜ肯定的・否定的自己複雑性は主観的幸福感に影響するのだろうか。川人・大塚(2011)は、ポジティブな認知が生じるためには、生じた出来事にポジティブな意味付けをするための潜在的な認知が活性化される必要があることから、肯定的自己複雑性が高ければ、生じた出来事をポジティブに認知しやすくなり、結果として満足感や幸福感が向上すると説明している。本研究の結果もこの知見を支持している。

3 概念から精神的健康への異なる影響関係が示された点においても、これらの 3 概念の独自性が示唆されたが、今後は各概念の項目数を増やして再検討する必要がある。

3. ＜状況性＞における自己統制感と精神的健康との関連

＜状況性＞における自己統制感を示す＜非意図性＞と精神的健康の関連を検討したところ、＜非意図性＞の高群が低群に比べて精神的健康が高いことが示された。「場面によって、本来意図している自分とは違う自分が出てくる＜非意図性＞」は、「意識した自分の使い分け＜戦略性＞」とは独立であることから、＜戦略性＞ではなく＜非意図性＞が適応の指標となる可能性がある。あらゆる場面に適応的に、臨機応変に「意識して自分を使い分ける」よりも、「意識しないで自分を使い分けできる」段階になると、精神的健康はよくなるのであろう。

<引用文献>

浅野智彦 (2001). 多元化する自己の二つのベクトル. 青少年研究会(編) 今日の大学生の

コミュニケーションと意識 (自費出版).

- Baird, B. M., Le, K., & Lucas, R. E. (2006). On the nature of intraindividual personality variability: reliability, validity, and associations with well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**(3), 512-527.
- Block, J. (1961). Ego identity, role variability, and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, **25**(5), 392-397.
- Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993). The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**(5), 834-846.
- 杜 健・加藤和生 (2020). 自己概念は分化しているほど心理的に適応しているのか: 個人能動性レベルからの再検討. *社会心理学研究*, **36**(1), 1-9.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 西平 直・中島由恵(訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- 畑野 快 (2009). アイデンティティ形成プロセスについての一考察—自己決定を指標として. *発達人間学論叢*, **13**, 31-38.
- 林 文俊・堀内 孝 (1997). 自己認知の複雑性に関する研究. *心理学研究*, **67**(6), 452-457.
- Hershberger, P. J. (1990). Self-complexity and health promotion: Promising but premature. *Psychological Reports*, **66**, 1207-1216.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: a theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**(3), 319-340.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, **74**(3), 276-281.
- 岩田 考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦(編) 検証・若者の変貌—失われた10年後の後に— 勁草書房 pp.151-190.
- 川人潤子・堀 匡・大塚泰正 (2010). 大学生の抑うつ予防のための自己複雑性介入プログラムの効果. *心理学研究*, **81**(2), 140-148.
- 川人潤子・大塚泰正 (2011). 大学生の肯定的自己複雑性と満足感, 幸福感および抑うつとの関連の検討. *パーソナリティ研究*, **20**(2), 138-140.
- 川上華代 (2013). 現代学生の特徴と学生相談についての一考察: 問題や症状が維持され, 変わらない学生の姿から見えてくるもの. *和光大学現代人間学部紀要*, **6**, 141-153.
- 桐山雅子 (2010). 現代学生の心理的特徴. *日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会* (編) *学生相談ハンドブック* 学苑社 pp.30-34.
- 木谷智子・岡本祐子 (2018). 自己の多面性とアイデンティティの関連—多元的アイデンティティに注目して—. *青年心理学研究*, **29**(2), 91-105.
- 木谷智子・岡本祐子 (2019). 自己の多面性とアイデンティティ研究に対する今後の課題——天谷氏・齋藤氏のコメントに対するリプライ——. *青年心理学研究*, **30**(2), 174-178.

- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social cognition*, **3**(1), 94-120.
- Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**(4), 663-676.
- Luo, W., & Watkins, D. (2008). Clarifying the measurement of a self-structural process variable: The case of self-complexity. *International Journal of Testing*, **8**(2), 143-165.
- 溝上慎一 (2008) 自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる—, 世界思想社.
- 村井史香・加藤弘通 (2020). 高校生を対象とした多元的アイデンティティ尺度の検討. 子ども発達臨床研究, **14**, 17-21.
- 武蔵諒祐 (2020). 多元的アイデンティティから見る現代大学生の特徴—理想と現実の不一致に着目して— 2020 年度前期特殊実験調査 I 未刊行.
- 佐藤徳 (1999). 自己表象の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について. 教育心理学研究, **47**(2), 131-140.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について. 精神医学, **27**(6), 717-723.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**.
- 高石恭子 (2009). 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援. 京都大学高等教育研究, **15**, 79-88.
- Woolfolk, R. L., Novalany, J., Gara, M. A., Allen, L. A., & Polino, M. (1995). Self-complexity, self-evaluation, and depression: an examination of form and content within the self-schema. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**(6), 1108-1120.
- 義田俊之・中村知靖 (2007). 抑うつの促進および低減プロセスにおける自動思考の媒介効果. 教育心理学研究, **55**(3), 313-324.